

---

# 【師と弟子のスケルツォ】

果実酒

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

【師と弟子のスケルツォ】

### 【Nコード】

N2541C

### 【作者名】

果実酒

### 【あらすじ】

凰華おつか生まれの少女、狩尾水実かりおみなみは、師匠ライゼルド『魔法』と呼ばれる力の修行を行っている。ある日、水実は草原で誰かに呼ばれる夢を見た。その夢に誘われる様に、水実は夜の草原へ向かう

＋序章＋（前書き）

この作品は、以前私が短編用に書き下ろした作品です。短編用なので、話の展開にはかなり無理があるかも知れません。拙い文章ではありますが、お楽しみ頂けたら嬉しいです。

【師と弟子のスケルツォ】

## + 序章 +

この世界には、東西南北に栄える四つの国がある。東の『鳳華』、西の『カルーア』、南の『ニコルル』シルカ』、北の『グランダツド』。

その東の大国『凰華』の西側に、此処『倭樹亜』は在る。海からは遠く、周りは山と森に囲まれた地域。其処に住まう民達は、その豊かな自然の中から生きる糧を頂戴し、日々自然と共に生活している。

と言えば、のどかな感じで聞こえが良いかもしれないが、実際はかなりシビアだ。海から離れているが為に貿易関係はほとんど栄えていない。周りが鬱蒼うつそうと生い茂る。いや寧ろ覆い茂る森の所為で、この地域を訪れる旅人や商人は少ない。本当に冗談なんじゃないかと思う位、ほとんど居ない。そもそも、倭樹亜の村や町には今だ保守的な集落も少なくない所為で旅人達も近寄ろうとしない、と言うのが有力な説らしいのだけだ。

更にもう一つ。自然の中から生きる糧を頂戴しているのはその通りではあるけど、実際は其処から頂戴しない事には生きていけないからそうしているだけ。農作物は育つし、家畜（乳牛や雌鶏めんどり）も育てられるけど、それだけでは動物性のタンパク質が足りないらしい。その為、多くの集落では、集落の中では農作物を育て、家畜を飼い、集落の外では狩猟を行っている所が多い。そんなド辺境ではあるけど、私狩尾水実かりおみなみはそのド辺境に住んでいる。

私が住んでいるのは、倭樹亜の中でも特に自然環境の素晴らしい所。つまり、一般的に開拓の進んでいないと言われている倭樹亜の中でも、最も人間の手が及んでいない所。

何故か。それは、私 正確には私達が、人里近くじゃ出来ない様な事を行っているから。

【師と弟子のスケルツォ】

この世界で『雀の涙』どころか『雀の細胞』程の人間しか実用的に使いこなす事は出来ない、そして、その源となる力すら備えている人間も極々僅かであるという、能力なのが技術なのか言い表しにくいもの。『魔法』と言う名のもの。

私は、その修行をしている。

+ 第一話 + 師と弟子

「……………ミナミ？」

草染めのローブを着た少年が、両手に腰を当てながら仁王立ちで私を見下ろしている。確かに少年だが、彼が私の師匠だ。

私はそんな師匠の様子を見上げながら、地面寝転がっている。正確には、倒れている。全身汗だく、服は泥だらけ。

そんな私達の周りに広がる草原には、直径十メートル位のクレイターが一つ。

師匠は、たつぷりと溜め息を吐いてから言う。

「私は『炎を出してみる』と言った記憶は有るのだが……………」

「はい」

あつさりと答える私。師匠は更に続ける。

「そして、『巨大な穴を掘れ』と言った記憶は無いのだが……………」

「そおですね。真にその通りにございます」

もうどうにでもなれ。そんな思いを込めつつ、棒読みで言う。

すると、今まで無表情だった師匠の顔に、くつきりと青筋が浮かんだ。

私は首を竦める。次の瞬間に訪れるだろう災いに備えて。

「いい加減力の加減を覚えろ！誰が『爆発を起こせ』と言った！？私が境界を張ったから良かったものの、お前一人で同じ事をしてみる！お前の身体は木っ端微塵だったのだぞ！？」

師匠は私を指差しながら怒鳴る。そこそこに本気で怒っているらしい。

しかし、私にも言い分は有る。私はすぐに立ち上がり、頭半個分下にある相手を睨め付ける。

「確かに加減が出来ない私も悪いですけど……………分からないから困ってるんでしょ！？貴

方も師匠なら『魔力』の加減方法位教えて下さい！」

「なっ……何を言うか！」

余程私に見下るされた事が癪しゃくだったのか、師匠は子供の様な言葉を返してくる。ウソだ。ただ私の言葉が癪しゃくに障っただけ。

この師匠、先天的にすごい魔力を持って生まれて来て、その技量も天才的。前者・後者とも師匠から聞いた話だけど、にも関わらず、どうすれば上手く魔法を使う事が出来るかを誰かに教える事が大の苦手なのだ。彼にとって、魔法を使う事は呼吸する事同じ事なのだから。

師匠はやや慌てた様子で続ける。

「良いか？ミナミ。魔力を操るには、誰かにその方法を教わるのではなく、自身の力・間性・経験によりそれを見出さねば意味が無い。そうでないと、自身が困るだろう？」

「今でも十二分に困ってます！どんな感じ、だけでも良いので教えて下さい！」

師匠の目が泳ぎ始めた。それもそうだ。自分でも分からない事を弟子に問い詰められれば、どんな師匠でもお手上げだろう。

さて、私の師匠はこの後どうするか。それは、

「さて、ミナミ。帰って茶と洒落しゃれ込もうではないか」

単純かつ素晴らしく分かり易い、逃げ。いつもの事ながら、本当に分かりやすい。

脱力しつつ、私は頷いた。

「……はい」

その返答を聴くや否や、師匠は見事な素早さで身を翻し、早歩きで帰って行く。師匠と私、それとかなり個性的な動物達の住まう小屋に向かつて。

+ 第二話 + 『ライゼルド』

初めて会った時、師匠は私に、名前は『ライゼルド』だと教えてくれた。

闇よりも暗い漆黒の瞳で、首の辺りで結わえられた雪の様に真っ白な長い髪。

背は低く、私の頭半個分下。顔は童顔で、初めて会った時には子供なんじゃないかと思った。更には、声も男性にしては結構高い。本人の前でそれを言っただけではない。ひどく落ち込むし、後でネチネチと何かを仕掛けてくる。例えば、私のハンバーグが少しだけ崩れている、とかその程度だけだ。

背格好が少年なので、一度年齢を尋ねてみたけど、年齢は教えてくれない。

やけに色々な場所の文化や慣わしについて詳しいな、と調べて一度生まれを尋ねてみたけど、出身地も教えてくれない。

それなのに、食べ物好き嫌いはずいぶん教えてくれる。尋ねてもいないのに教えてくる。それはもう『アンタは子供か』と怒鳴りたくなる程に。ちなみに、焼き菓子が好きで、特にクッキーが好きらしい。聞いてもいないのにしつこく教えられたので、すっかり覚えてしまった。

口調は少し古めかしいものだけど、それとは対照的に、性格は子供の様で、大人気無さ。年齢は分からないけど、は尋常じゃない。私がカードゲームやボードゲームで勝とうものなら、何度も勝負を仕掛けてくる。しかも、自分の勝ち数が私の勝ち数を上回るまで。

服装はほとんど変わらず、いつも灰色の、同じ様なデザインの裾長のローブを身に纏っている。いつも同じ物を着ているのではなく、同じ様な服を何着も持っているらしい。本人曰く、似ているのは私の気の所為で、それぞれの服で生地や色が違うと云って

いるが、特に色になると師匠以外では違いが分からない。

こんな風に、子供の様で子供じゃない、けれど大人の様で大人げが全く無い人が、私の師匠ライゼルドだ。

一方の私はと言うと、髪は栗色で長さは肩位まで、瞳は焦げ茶色。顔立ちは普通だけど、目の程良い大きさは自慢だ。特に自慢出来る顔でもないけど、まあ気に入っている。それに、今周りに居る唯一の男性が師匠なら、特に外見に気を配る必要も無いだろう。別に、師匠を男性として見ていない訳じゃなくて、そういう対象として見ていないだけだ。

背は最後に測った時は一五〇センチ後半だったと思う。年齢は十七。師匠曰く、年齢のわりに背が高過ぎだと言っているが、そんな事は無い。私の生まれ故郷や、時々訪れている村の女の子達と比べれば、変わらない。師匠が、私より背が低いので、妬んでいるのだろう。

服は、師匠とは違って定期的に近くの集落　　と言っても徒歩三日程　　まで貰いに行く。

もちろん、無償ただという訳にはいかないので、物々交換だ。それでも時々「もつ着ないから」と言つて、無償で譲ってくれる親切な人も居るのだけど（師匠に、この人を見習わせなければならぬ）。

私と師匠が出会ったのは、今から二年前だった。

得体の知れない力を持っていたが為に故郷を追い出され、森の中を彷徨っていた私を、師匠が助けてくれたのだ。私はきつと、酷い格好をしていただろう。それ位長い間彷徨っていたかも分からないし、転んだり、あちこち擦り剥いたりで、泥塗れまみ、傷塗れだったに違いない。

師匠は私を助けた後、私に魔法の力「魔力」がある事を理由に、私に弟子入りを勧めた。もちろん、私は拒んだ。当時は、私より年

【師と弟子のスケルツォ】

下の少年にしか見えない相手に弟子入りなんて、冗談としか思えなかった。けれど、結局相手の意見に首を振る　もちろん縦にしかなかった。何故って、あれだけ脅しを掛けられれば、人間知らないうちに首を振りたくもなるもの……という事にしておこう。

とにかく、そんな事があって、私は師匠の下で魔法の修行を行っている。師匠と愉快的仲間達（とにかく個性的な動物達だ）の住む小屋の家事付きで。

それなりに楽しい日々は過ごしているし、愉快的仲間達も結構良くしてくれている。言う事は無い。

ただ一つ、師匠が私に魔力の制御方法を教えてくれない事を除いては。

+ 第三話 + 水実の観た夢

夢を観た。

誰もいない夜の草原で、誰かにと呼ばれ続けている夢を。

草原には見覚えがあった。私がいつも修行をしている草原だ。

しかし、私を呼ぶ声に聞き覚えは無い。男性のもの様だけど、

師匠のものではない。師匠の声より低く、やや年齢を感じさせる声だった。時々訪れる集落で出会った男性達のそれとも、全然違う。

それにも関わらず、私は見えない声の主を探し、草原を駆けていた。私自身が一番驚く程の速さで。恐らく、狼や虎なんかよりも速かったと思う。

そんな自分が怖くて、正体の分かたない招待の主が怖くて、いつの間にか目を覚ましていた。

「……………で？」

「『で？』って……………それだけ！？本気で結構私怖かったんだからね！！」

「落ち着きなつて、水実。文法めっちゃめっちゃだしさあ」

そう言いながら、灰色の毛で琥珀色の瞳をした猫　ちなみに雄だ　は尻尾を揺らした。

師匠の小屋に住む『愉快な仲間達』は、本当に個性的だ。個性的過ぎて、初めの中は頭すら痛くなった程。人語を喋るのは基本で、背中に羽を生やした兔やら、炎を吐く犬やら、自身の身体を自在に石化出来る蛇やら……………とにかく、奇想天外の宝庫だ。

今私の目の前でちょこんと座っている子は、見た目は普通の猫と全く変わらない。けれど、彼にはかなりの魔法の力が備わっている

師匠談　のだ。名前は琉りゅう。

その琉は溜め息を吐きながら言う。

「大体さあ、大騒ぎしすぎなんだよ。たかだか夢の話でしょ？それに、水実はどうせすぐに忘れちゃうんだから」

「何それ。何か私が物忘れ酷いみたいじゃない」

「その通りだよ。水実もライゼも、自分の都合が悪い事はすぐに忘れちゃうんだから」

「……………」

「反論出来ないでしょ？」

私が悔しそうに唸ると、琉は『勝った』と言わんばかりに胸を張った。さっきまでの会話さえなければ、「可愛い」で片付けられたのに……………」

「とにかく、夢は夢、現実が現実。気にしないのが一番だと思うよ、ボクは」

今度は顔を私の方に突き出して、はつきりと言い放った。

「そうなんだけど……………」

「いいから、気にしないの！」

確かに琉の言う通りだ。夢の中の出来事は、所詮夢の中での事。

現実の世界には何の影響も及ぼさないし、起きれば忘れてしまう出来事だつてある。

けれど、

「……………気になる……………」

私は『うん、うん』唸りながら言った。

あれだけリアルで、あれだけの恐怖感を覚えた夢なんて、初めて観た。おまけに周りには見覚えの有る景色。聞き覚えはないけど、何故か放つておいてはいけけない様な男性の呼ぶ声。気にならない筈は無かった。

『うん』と大きく頷いてから、私は宣言した。

「よし、今夜確かめに行ってみる！」

「ええええっ!？」

琉は元々丸い目を更に丸くして、大声で叫んだ。

私は慌てて彼の口を塞ぐ。

「ちよつと……大声出さないでよ！師匠にバレなくても、他の誰かにバレたらどうするのよ！？」

私が半ば脅えながら周囲を見回していると、琉は私の手を振り払って一気に捲し立てた。

「そうだけど！『夜一人で外に出るな』ってライゼ言ってたでしょ！？ダメダメ！それだけは絶対にダメ！何かあったら怒られるのは水実だけじゃないんだよ？ボクだって一緒に怒られるんだからね！何で止めなかつた！？』って！」

「だから大声出さないでって！」

再び琉の口を塞ぐ。さつきは片手だったけど、今度は両手で。さつきの何倍もの速さで、首を振る。

幸運な事に、周りには誰にも居なかった。私は安堵の溜め息を吐いてから、琉を睨め付ける。

「何よ、『何かあつたら』って。琉、さつき『現実には現実、夢は夢』って言ってたじゃない」

「逆だよ！ボクは『夢は夢、現実には現実』ってゆつたんだもん！」

「一緒よ！」

「違うの！内容は一緒かもしれないけど、違うの！」

「あーはいはい。分かったわよ」

適当に聞き流しつつ、適当に応える。

琉に何と言われようと、私の気持ちはもう固まっていた。今夜、いつも行くあの草原まで行って、あの夢が一体何だったのか確かめに行く。確かな答えが出なくても、何かの手がかりが有ればそれで良い。

琉の言う通り、私は師匠に夜の一人歩きを禁じられている。この辺りには、夜行性で肉食の獣が多くいるらしいから。私一人が相手をするのは、まだまだ凶暴過ぎる相手だった。だから師匠は、私が夜に外を一人で歩く事を許可しないのだ。

それならば、私『一人』で出歩かなければ良しと言う事にはなら

ないだろうか。私一人で対抗出来ない相手のだから、対抗出来る度胸と力がある誰かが同行してくれば、もちろん私も安心だし、師匠にも言い訳が出来るだろう。

私の考えを察したのか、琉はブルルツと身体を震わせた。

「あの〜水実？何かものすごい事企んでない？」

「『企んでない？』って何よ。失礼ね。私はただ純粹に頭を働かせているだけでしょ？」

「い〜や！何か企んでる！ぜっ……………ったいに何か悪い事考えてる！」

「……………ま、いいわ。琉の協力が無いと困る事だし」

その言葉を聞くや否や、琉は、小屋に侵入してきたネズミを追いかける時以上の素早さで駆け出した。しかし、逃がさない。私はニヤリと笑いながら、琉を捕獲する。

「やつ……………ホントに、やめて、水実」

「ん〜。それは出来ないわねえ。さっきも言ったでしょ？『琉の協力が必要なんだ』って」

私は琉を押さえながら、珍しく大人しい彼の耳元で、

「琉、今夜一緒にいつもの草原まで行つてくれない？」

琉は、まるで「ご飯抜き」を宣告された師匠みたいな顔のまま、固まってしまった。

+ 第三話 + 水実の観た夢（後書き）

まだまだ未熟な文章なので、アドバイス等を頂けると嬉しいです。  
ご感想がございましたら、よろしく願います。

【師と弟子のスケルツォ】

+ 第四話 + ドロ?

「ミナミー? 居らんのかー?」

午後十時、ライゼルド宅。ライゼルドは、弟子の水実の姿を探していた。理由はただ一つ、コーヒーが飲みたいが為。数週間前、水実が近くの村まで衣類の調達に行った際に、村の住人からコーヒー豆を貰ったのだとか。商品に出来ないクズ豆ではあるが、十分美味しく頂ける味だったのだとか。

水実が弟子入り 半強制的にさせたのだが してからと言うもの、すっかり家事をしなくなったライゼルドにとって、豆を挽いて、湯で抽出する、と言う作業はこの上なく面倒な事他ならない。だから、面倒な家事は全て水実任せに。水実はブツクサ言いながらも家事をこなしているのです、すっかり頼りつきりになっているのが悲しいところではあるが。

しかし、困った事に、いつもなら家事を嫌な顔一つせず とう事になっている する水実が、居ない。入浴中かと思ひ、水実と普段から仲の良い雌メスの舐なに浴室を見てきて貰ったが、居ない。部屋に帰ったのかと思ひ、こっそり覗いてみるが、やはり居ない。ライゼルドの愉快的仲間達と一緒に居るのかと見回してみたが、これまた居ない。

(何処に行った?)

まさか、自分と『かくれんぼ』なる遊びをしようと思ひ……? いや、それは無い。絶対に無い。独りでそんな妄想を膨らまし、自身で否定する。

(……仕方が無い)

ライゼルドは溜め息交じりで愉快的仲間達の一番集まる処、居間へ向かった。これだけ動物達 一般的に魔物と呼ばれるものも居るが 居るのだ。誰かが水実の姿を目撃しているだろう、と踏んだのだ。

「誰か、ミナミを見なかったか？」

ライゼルドが言つと、思い思いに寛いでいた愉快的仲間達が、一斉に振り向いた。

「何だよ、ライゼ。また茶か？」

「違うよ。きつと服のほつれだよ」

「そうじゃない。小腹が空いたから、何かねだろつとしてるんだ」

「あれ？風呂の湯はりじゃねえの？」

「いや、絶対に……」

「だあつ！私が何を頼むかを言い合つな！」

好き放題に言い合つていた愉快的仲間達に一喝した。皆、ニヤニヤクスクス嗤いながらも、黙る。

一息吐いてから、ライゼルドは再び問う。

「誰か、ミナミの姿を見ていないか？先程から見当たらんのだが」

動物達は、互いに顔を見合わせた。そして、首を傾げるもの、首を横に振るもの、肩を竦めるもの、それぞれがそれぞれの表現方法で、水実の目撃を否定する。

（無駄だったか）

ライゼルドは唸つた。小屋中探しても居ない。動物達に聞いてみても手懸り無し。はつきり言つて、お手上げだった。

これからどうするか、ライゼルドが考え始めた瞬間、愉快的仲間達の中から声があがった。

「そう言えば、水実、『今日変な夢観た』って言つてたわね」

そう言つたのは、風を自在に操る力を持つ、雌の狐だった。彼女は、よく水実の相談に乗っているらしく、ライゼルドの知らない様な悩みや思いも知っている。

「……………変な夢だと？」

ライゼルドは眉を顰めた。そんなの初耳だった。食事中も、修行中も、洗濯の最中も、何かを考えている様子は有つたが、彼女は『変な夢』についての事は一言も口にしなかった。

「それはどんな夢だと？」

「いつも水実とライゼルドが修行している草原で、男が呼んでいる夢って言っていたわ。男の姿は見えなくて、声だけで水実を呼んでいるんですって」

「……………男が？」

「ええ、そう言っていた。間違いないわ」

彼女の言葉を聞き、ライゼルドは顔を顰<sup>しか</sup>めながら顎に手を添えた。そして、数秒考えた後、

「すまない、少し出かけてくる。留守番をよろしく頼む」

動物達の返答を待たずに勢い良く踵を返した。そして、ドアを少し乱暴に開き、小屋を出て行った。

その眼、その顔付き、その雰囲気、全てが普段のライゼルドのそれではなかった。動物達は、敏感にそれを察していた。

+ 第四話 + ドロ? (後書き)

ご感想・ご要望・アドバイス等、大歓迎です。  
よろしく願います。

【師と弟子のスケルツォ】

+ 第五話 + 銀色の狂気

夜の草原は昼間と違い、どこか凄然せいぜんとしたしていた。陽が完全に落ちて、気温が下がり、風も冷たくなつたからだとは思うけど、それだけでこんな寒々しくはならないだろう。

何て言うか……そう、雰囲気が全く違うのだ。

いつもは暖かくて優しくて和やかな雰囲気なのに、今は真逆。冷たくて威圧的で禍々しい感じがして、すごく怖い。このままここで立っているだけで、喰われてしまいそうで……。

「……え……？」

『喰われる』？何でいきなりそんな言葉……。

確かに、今この草原の雰囲気は何だか異常な感じがする。けれど、何かが飛び出て来るとかそんな空気ではない。寧ろ、私と琉じゅうだけが、この世界から切り離されている空間で孤立している感じ。喰われるも何も、私を食べようとするものが現れる雰囲気ではない。

じゃあ、何で？私はもう一度首を傾げる。

その時、私の肩に何かが触れた。暖かくて柔らかくて、でもものすごい気持ち悪い何かが。

「いやあっ！！」

思わず私は叫んだ。肩に触れた何かを払い除け、振り返る。そこに在った いや、居たのは二十代後半だろう男性。髪の色は銀色で短髪、切れ目の蒼い瞳、なかなかの長身だ。私の反応と、手を払われたのと、いきなり振り向いた所為か、目を丸くしている。

その人は、何度か瞬きをしてから口を開いた。

「あの、大丈夫ですか？お嬢さん」

「え？……あ、はい。大丈夫……です」

一瞬、自分に向けられた言葉だと分からず、反応が遅れた。ほとんど何も考えずに、ほとんど反射的に口を動かす。これでは、「大丈夫」と言う言葉に説得力が欠ける。

しかし、彼は「良かった」胸を撫で下ろす。それから、私の顔を覗き込む様にして言った。

「驚かせて申し訳ありません。ただ、こんな夜更けに貴女のような女性がこんな処に佇んでおられたので、どうしたのかと思ひまして」

「あ……ああ、そうですか」

今更になつて、ドキドキしてきた。見ず知らずの男の人がいきなり声を掛けて来たからだけじゃない。心配してくれたらしい相手の好意を、思いつき打ち返す様な反応をしてしまった自分が、ものすごい恥ずかしい奴に思えて来たから、だ。

私は、しどろもどろに言う。

「あのっ！こちらこそ、申し訳ありませんでした……」

「何故貴女が謝るんです？悪いのは私の方で」

「いえっ……あの……。心配して下さいなのに……その……手を払ってしまつて」

「ああ、その事ですか」

男は、口に手を当てながら小さく笑つた。

「あれは私がいけないんです。後ろからいきなり肩を掴まれれば、誰だつて驚くと思ひますよ？驚いた拍子に手を叩く位、当たり前な反応ですよ」

「で……でも」

「いいんですよ」

彼は人差し指を私の唇に当てながら、

「貴女は何も悪くない。悪いのは私の方です」

ニツコリと笑つて、そう言った。

目眩めまいがした。彼の行動に酔っている訳じゃ、ない。

全身の神経と言う神経が、一度に寒気を訴えてきた。それに一瞬遅れて猛烈な吐き気が、その後に身体の力と言う力が感じられなくなった。

立っている事すらままならず、その場で両膝を付く。男の小さな笑い声が、頭の上から降つて来る。

「なっ……何を……したんですか……っ……」

声が思っ様に出せない。頭では出そうとしているのに、喉の辺りが痺れて、言う事を効かない。

彼は、そんな私の姿を見下ろしながら、肩を震わせる。

「少し、貴女の身体の自由を奪っただけですよ。ご存知ですか？世界には、ほんの少量を口に含んだだけで人の動きを止める事が可能な毒があるのですよ」

「……！？……毒！？」

「ええ。毒です」

クスクスと笑いながら、彼は言う。人がこんなに苦しんでいると言っのに、それを楽しんでいるかの様な、嫌な笑い方だ。

背中中を、嫌な悪寒が駆けて行った。

「………っ………琉！琉！？何処に居るの！？琉っ！」

必死になっつて、琉を呼ぶ。自分の身体の自由が利かない今、頼りになるのは琉だけ。師匠曰く、琉にも相当の力があるらしいし、彼ならきっつと何とかしてくれる。

しかし、私の微かな希望も、この人は一瞬にして崩してくれた。

「『りゅう』……？ああ、あの灰色の猫の事ですか？あの猫なら、只ならぬ力が有る様でしたので、此処の外に居て貰っつてますよ」

「………？………『此処』？」

私その単語を繰り返すと、彼は私を蔑む様な目で見下ろしながら、

「やはりお気付きではありませんか。あなたが居る此処は結界

この私が創り上げた空間の中なのですよ」

なるほど、今夜の草原の雰囲気がおかしかったのは、時刻の所為でも陽の有無でもない。あの草原とは全くの別空間で、全くの人口の空間だから、異なる空気だったのだ。

「それでも！琉なら……」

「此処に入るには、私の招待が必要となります。ですから、あの猫がこの結界の中に入り込む事は出来ません。残念でしたね」

そう言いながら、同情の念を感じさせない様子で嗤う。

腹が立った。人を小馬鹿にした態度が、いちいち癪しやくに障る。半分反抗の意味を込めて、私は彼に問いかける。

「あなたは一体誰なんですか？何が目的なんですか？何故こんな事をするんですか！？」

「おや、まだ嘔こえすりますか？全く、元気なお人だ」

感心した様子で頷きつつ、眉根を寄せる。毒の効き具合に不満があったのか、それとも私の言葉が不服だったのか、それともまた別の理由か。銀髪の男は、ふうと感慨深げに嘆息してから、言う。

「失礼な方ですね、貴女も。私とは夢の中でお逢いしたでしょう？尤も、貴女は私の姿を観てはいないでしょうが」

「……夢……？」

「そう。昨夜貴女の観た夢は、私が貴女に観せた夢。そして、貴女を呼び続けたあの声は、私のもの」

私の目の前に跪ひざまずき、私の顎を掴んで上に向ける。丁度、彼の瞳と私の瞳が真っ直ぐに向き合う様に。

「何の……為に……？」

銀髪の男は、ふふつと笑う。

「知りたいですか？すぐに意味が無くなるのに？」

蒼い眼が、爛々と輝いている。口元が、緩やかな弧を描いている。どちらも、綺麗で誉められる様なそれはなく、禍々しくて歪みきつたそれ。

「こんな状況でなければ酔いしれてしまっただろう声で、彼は言う。

「私は、貴女が欲しいのですよ。 狩尾水実」

「……！？」

『悪寒』なんて生易しいものじゃない。全身に気味の悪い液体を塗りたくられた様な、全く身に覚えの無い感覚に陥った。

それと同時に、途轍とてつも無い身の危険を感じた。それも、軽く色めいた感じのする『危険』ではなく、それ以上に直接的で、『死』の香りの漂う『危険』だ。

何故？

答えは簡単だ。

彼の瞳には、私の『死』以外何も映ってはいない。そんな輝きしか、そんな光しか宿していないのだから。

男は、高潮した様子で告げる。

「貴女を喰らえば、私には彼奴あやつと同等……いや、それ以上の力が手に入る！我が榮譽の為、我が位の為、その命を捧げなさい。狩尾水実！」

懐から取り出した鉛色の短剣を高らかと掲げた。創り物の月の光を受け、裂けんばかりに口の端を吊り上げ、狂った様に笑う。

もう駄目だ！

私は覚悟を決めて目をきつく閉じた。

あの時、琉の言葉に従っていれば、こんな事にはならなかったのだ。死肉を、狂いきった男に喰われるなんて、最低最悪の最期の迎え方をする事も無かった。

師匠の言い付けさえ、守っていれば

(……師匠……?)

ふと、師匠の顔が浮かんだ。不機嫌そうに眉をひそ顰め、呆れた様に溜め息を吐いている顔が。

師匠は、私がこの男に殺されたら、どう思うのだろう。

私を馬鹿な弟子だったと、記憶の片隅に追いやるのだろうか？

それとも、馬鹿な弟子だったが、と少しは悲しんでくれるのだろうか？

それとも……。それとも……。

涙が溢れてきた。溢れて、溢れて、次々に眼の端から伝い落ちて行く。泣かまい、泣かまいとすればする程、涙が止まらなくなる。顔を俯かせたまま、地に向かって嘆いている様な格好で泣き続ける。その姿を見て、男は更に嗤う。私が死への恐怖を抱いて、命乞いをしていると思ひ込んでの事だろうけど。

銀髪の男が何かを言おうと、息を吸った。

【師と弟子のスケルツォ】

けれど、それはそこで終わった。

「それ以上、我が弟子に触れるでないぞ。アスラフィルの小僧」

+ 第六話 + 白髪の魔法使い

私と銀髪の男は、同時に声のした方向を向いた。男の方は、その一点を見つめたまま、後退あしずきっていく。

私達の視線の先に立っているのは、長い白髪に漆黒の瞳、闇色のローブを身に纏った、顎にやや丸みのある、背の高い若い男。見た目は、この銀髪の男よりも若い。

「水実、無事だな？」

彼は、落ち着いた声で言った。

「……師匠……」

姿は違う。声も違う。纏っているローブの色も違う。けれど、私には分かった。

彼は、弟子に家事の全てを押し付ける割に文句を言い、並みの子供の数倍の幼さと並の大人の数倍の落ち着きを併せ持ち、童顔と背の低さを何よりも気にしていた、私の師匠、ライゼルドだ。

師匠は、悠然と草原を歩いて来る。その姿は、民から絶対の信頼と尊敬を集める、物語の英雄そのもの。私と男の間に割ってはいると、低く、よく響く綺麗な声で言った。

「浅はかな。力を持つ者の肉を喰らい、それを我が物にするか。その心の弱さ故に、嫡子になり損ねたのだろうか？」

「……っ……黙れ」

男は後込みしんじしながらも、唸る様に言った。しかし、それでは師匠の口を止める事は出来ない。

「確か、其方の腹違いの弟だったな？」

「黙れ」

淡々と続ける師匠と、歯軋りをしながら止める男。どちらがより強者であるかは、態度を見て明らかだった。

師匠は更に続ける。

「それも、其方にとつては卑しい身の女の」

「黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れ黙れええっ!!」

男が見窄みすぼらしく吠えた。肺の空気を一気に吐き出したのか、ゼーは「ゼーは」と呼吸を繰り返してから、再び声を上げる。

「……言わせておけば好き放題言いおつて！何故貴様が此処に現れる！？何用だ!？」

銀髪の男は、肩を震わせている。徐々に後退した所為か、師匠との間合いは十二分にとつていた。

師匠は意に介せず。飽くまでマイペースに続ける。

「先程告げたであろう？水実は我が弟子。師が帰りの遅い弟子の気に掛けるのは当然であろう？」

「弟子？貴様がか？己の力でさえまともに操れぬ貴様が、弟子など」

「其方に何と言われようと、一向に構わん」

師匠は、彼の言葉を遮る様にして言った。さつき自分の言おうとした事を邪魔されたから、その腹癒はらせなのだろう。こんな時でも、大人げない人だ……。

「其方の様な、他の者から力を奪う者に何と言われようと、全く構わぬよ」

「……貴様……今何と？」

男は、犬歯を剥き出しにしながら唸る。しかし、師匠は、明らかに威嚇と分かるその様子にも全く動じる様子は無く、

「おや。聞こえなかつたか」

何処までも自分のペースで語る。

「其方が、他の者を贄にえにする外道だと言ったのだ」

加えて、と師匠は感情の無い声のまま続ける。

「水実は、其方の贄にする程、安く卑しい身は無い」

「……貴様ああああつ……!!」

男が般若の様な面で、眼を血走らせて、叫ぶ。放たれたのは、確かな殺意と膨大な魔力。男の全身から吹き出た靄もやの様な魔力が束となって、渦となって、真つ直ぐ師匠の方へ。

「……………師匠！」

私は、思わず叫んだ。自由の利かない身体を必死に動かして、立ち上がるうとする。

けれど、師匠は

「お前は其処で大人しくしている、ミナミ」

私に肩越しで振り返りながら、厳しいけれど何処か優しく笑っている様な顔で告げた。顔や雰囲気、声も背丈も何もかも私の知る師匠とは違うけど、それは間違い無く師匠の表情<sup>かお</sup>。

その言葉通り、私はその場にペタリと座り込む。彼の気迫に圧された訳でも、毒に参った訳でもない。そうしているだけでも、師匠がこの状況を何とかしてくれる気がしたから。

師匠は男の放った魔力の塊に向き直ると、少しだけ眼を細めた。忌々しげではなく、寧ろ蔑む様な目つきで。

「全く。希薄な魔力だ」

風に流されるのではと思う程小さな声で囁くと、男に向かって片手を伸ばした。

それ以外には何かをした素振りも様子も無かったのに、渦巻いていた男の魔力が一瞬にして掻き消えた。元々、そこには何も無かったかの様に。

銀髪の男は驚愕に顔を歪め、師匠は当然とでも言いたげに胸を張る。

「これで分かっただろう？」

師匠の低い声が、風の音すらしない創り物の草原に響き渡った。

「其方と我では格が違い過ぎるのだよ。我と水実以上に、だ」

「なっ……………何を言っている!？」

師匠の言葉に、銀髪の男と私は同時に目を丸くした。

今回ばかりは、彼の意見に同意する。彼は魔力を自在に操れるし、相手を陥れる事も出来るから、こう言う状況には向いているだろう。対して、私とえば、魔力は満足に制御出来ない上にバカ正直、嵌<sup>はめ</sup>める嵌められると言え、当然嵌められる側だ。

なのに師匠ししやうは、銀髪の男よりも私の方が格上だと言った。私ならば疑問を抱く程度で済むが、銀髪の男はどうなのか分からない。

「何だ、分からんか？」

師匠は、私ではなく、男の方を鼻で笑いながら告げた。

「純粋な『魔力』だけの勝負になれば、其方よりも水実の方が優ると申しておるのだよ。他人を喰らうてまで、力を手に入れようとする其方ではな。アスラフィルの」

男の眉間が、ピクツとなった。私の口の端がヒクツとなった。

「ライゼルドオオオッ！！」

叫んだのは、銀髪の男。眼を爛々と光らせながら、身体中から魔力を放出させる。それを、そのまま師匠にぶつけようとするが、先程と同じ様に掻き消されるだけ。師匠に全くダメージは無い。

逆に、自分自身がダメージを受けている。「魔力を放出させるには、相当の力と体力を消費する」、と以前師匠が言っていたのを思い出した。あれだけの魔力を二度も、しかも続けて放てば、その疲労は想像を絶するものだろう。

男は、ゆっくりと膝を付いてから、俯うつむせに倒れた。

それに遅れる事数瞬、周りの景色が歪み始めた。彼の創った世界が、壊れた。ガラスが割れ、崩れていく様に、歪んだ空間が徐々に崩壊していく。

後に現れたのは、穏やかな草原の風景。空には、煌々と輝く月が。いつもの、穏やかで優しい、自然の光景だった。

+ 第七話 + 狂気の去りし後

「何だっただんですか……？アレは」

帰り道、私は琉に散々引つ掻かれた腕をさすりながら、問い掛けた。ちなみに、その琉はと言うと、「だから言ったのにー！！」と泣き叫びながら私を引つ掻き回し、不機嫌そうに「先に帰るー！！」と告げ、さっさと走り去ってしまった。

私達の前を歩く師匠の姿は、相変わらずさっきの黒いローブ姿の青年だ。その姿のまま、彼は答える。

「アレはアスラフィル家の長男で……ああ、『アスラフィル家』と言うのは」

「私はそんな事が訊きたいんじゃないんです！」

一度息を思いつき息を吸ってから、言う。

「何で師匠いつもの格好じゃないんですか！？あの人を『小僧』って、師匠おいくつなんですか！？その前に……師匠、一体何者なんですか！？」

「むう……」

師匠は小さく唸った。まず、どれから答えるべきか考えているのか、それともどう誤魔化すかを考えているのか。

しばらくして、彼は洪々と言った様子で溜息を吐いてから、非常に言い辛そうにボソボソと喋る。

「これが、私の本来の姿なのだが……」

「はい？」

私は声をあげる。上手く出せず、声が裏返ったが、気にしている余裕は無い。

「ええーつと……ごめんなさい。さっぱり分かりません」

「ああ、そうだろうな。そうだと。分かっていたさ」

何だかとても馬鹿にされた気分だ。本人にその意志は無いのかも知れないが、それでも腹が立つ時は腹が立つ。

師匠は「うん、うん」と唸りながら、続ける。

「お前が普段見ている私の姿は、私が幼い頃の姿だ」

「幼い頃の姿？」

私が繰り返すと、師匠は、そう、と歩きながら語る。

「以前話した通り、私は生まれつき魔力に恵まれ、それを操る事も出来た。しかし、年を取るに連れ、魔力の方はかりが強くなり、扱いきれなくなってしまった。魔力の成長に、制御力の成長が追いつかなかったのだよ」

「それとこれと、師匠のこの姿と何の関係があるんです？」

「……………それは……………」

師匠は、目を泳がせた。またしても、もの凄く言い辛そうに。溜め息一つ吐いて、続ける。

「この姿は、私の弱さの象徴なのだよ。加速度的に膨らむ魔力に恐れをなした私は、『幼い頃の魔力なら扱える』と考え、若返りの術に縋すがった。ご覧の通り、その術は成功し、私は幼い頃の姿に戻った。そして、自身で十分に抑える、操れる程の魔力を手に入れた。しかし、世の理ことわりに反した私の身体は、老いる事を封じられた」

「封じられたって……………師匠は、年を取れないって事ですか？」

「その通りだ。初めは自分の知識と世の流れを照らし合わせる為に時を数えていたのだが、その内苦痛になって来て、止めたのだ。だから、我が身がどれ程の時を刻んで来たのかも分からんだよ」

自嘲的に、けれどどこか悲しげに答えた。

それから、師匠は急に立ち止まった。慌てて立ち止まった私は、彼よりもだけ前で振り返る。

「……………水実」

師匠は、秘密を打ち明ける前の子どもの様に、どこかおどおどした様子で、口を開いた。

「その……………お前が望むなら……………近くの村にでも街にでも、里親を探してやる。私の下で修行を続けても、お前には何の利益もない。逆に、今回の様に危険に晒すだけだ。……………えーっと……………だから……………」

ああ、なるほど。師匠の言いたい事は何となく理解出来た。それを言葉では言い表せないけど、何となく考えている事が伝わった。師匠が私を心配してくれるのは嬉しい。今回の様な事もあれば、不安になるのも良く分かる。私だって、今度あの男一（アスラフィル家の長男とか言っていた）が襲って来ても、太刀打できる自信は皆無だ。

だけど、私にだって言い分はある。

「師匠、よろしいですか？」

私は、これ以上師匠に何も言われない様に、ハッキリと告げる。

「師匠が私を気に掛けてくれるのは嬉しいです。私だって、力はあるのかも知れないけど、全然使えないし、師匠の重荷になる事位、分かっています」

「重荷ではないが……分かってくれるなら」

「けど、逆にちつとも嬉しくありません」

私の言葉に、師匠は目を丸くして固まった。その隙だらけの顔が、面白く、気味がいい。私の言い分を無視しようとした報いだと思つて、存分に味わうと良い、と思つた。

固まる相手を余所に、私は堂々と胸を張りながら、

「さつきも言った通り、私は自分の魔力を満足に操れません。それが原因で、他の人に被害を及ぼす事だつてあるでしょうし、自分自身を死に至らせるかも知れません。ですから。私は、師匠の下で修行を続けた方が、私の身の為だと思えます」  
とても胸の張れた内容じゃない反論をする。

しばらく口を開けたまま呆けていた師匠だが、やがて、それまで忘れていた動き方を思い出したかの様に、声と共に口を開いた。

「だが……っ！」

「いいんです！」

私は、まだウダウダと言う師匠を止めてから、両手を腰に当てて続ける。

「私が修行を続けたいんです！」

その声は、思ったより良く響いた。想像以上に響いてしまったので、少し恥ずかしくなって、熱くなる頬を手で押さえつつ視線を落とす。

師匠は、さっきと同じ様にポカンとした顔で見えてくる。これならいつそ呆れた顔が冷めた顔でもしてくれた方が増しだ。頭や顔に疑問符を浮かべられると、私の羞恥心が更に強くなってしまふ。

これがうら若い恋人達の行動ならば、甘酸っぱい青春の香りでもするのだろうか、自分の失態を恥じる者と相手の言葉に驚くもちろん青春の香りなどしない。者との間では、到底無理。加えて、普段の師匠の行動を見る限り、私から甘酸っぱい感情が生まれる予定は今の所無い。

私達の間、随分長い間沈黙が降りた。風が周りの木々の葉を揺らす音、遠くで何かの動物が鳴く声だけが、しばらく辺りに響いていた。

「……………分かった……………」

やがて、師匠は盛大に溜め息を吐いてから、呟いた。心無しか、その顔には『疲労』やら『徒労』やら、とにかく『疲れ』に関する色が浮かんでいる様に見えた。まあ、心無しも何も、私がそうさせた様なものなだけだ。

「私もまだまだ未熟だ。どこまで庇かはいられるか分からんぞ？」

「私こそ、いつまで家事を真面目に続けるか、知りませんよ？」

片や面倒そうな表情、片や満面の笑み。もちろん、前者は師匠、後者は私だ。

「じゃ、引き続きよろしくお願いします。師匠」

私は満面の笑顔のまま、軽く首を傾げる。これを一般的には『勝利の笑み』と言うとか、言わないとか。今までに経験した事の無い位良い気分になれる、素敵な笑顔だ。

しかし、私には気持ちの良い笑顔でも、師匠にとってはまるで別なものらしい。師匠は、『苦渋』の二文字を眉間に刻ませながら、盛大な溜め息を吐く。

「……………好きにしる……………」

そう言い終えるや否や、師匠はさっさと歩き出し、私の横を通り過ぎて行った。その歩調は、いつもより少し速い。私に何かを指摘されて臍へそを曲げた時の歩調だ。

その後ろ姿を、私はニコニコしながら眺める。師匠には悪いが、とても清々しい気分だ。

「ミナミ、置いて行くぞ！」

師匠は、振り向かず、真っ直ぐ前を向いたまま声を張り上げる。

これも、不機嫌な時にする仕草だ。相手の反対側を向いて声を張り上げて、本人が思った以上に聞こえていない事を知っているのだろうか？

けれど、今はそんな事どうでもいい。師匠にカードゲームやボードゲームで勝った時以上の達成感の様な感情が、他愛も無い考えを頭の片隅に追いやってしまう。

「はい！」

思った以上に、大きな声が出た。そして、また良く響いた。けれど、幸いな事に羞恥心が襲って来る事は無かった。今は、大きな勝利の喜びがずっと強いから。

私は、師匠の後姿を走って追いかけた。

こうして、私の修行は続く事になった。

+ 第八話 + 『アスラファイル』

翌日、小屋である銀髪の男の事について、師匠に聞いてみた。師匠はもちろん渋っていたけど、やがて「仕様が無い」と言いたげに降参し、話し始めてくれた。

師匠が言いかけていた『アスラファイル家』というのは、此処鳳華おうかで古くから栄えているという、魔法使いの一族の事らしい。この一族の得意とする魔法は、死者の魂や骸むくろを自分の思う通りに操るもの。「死霊魔術ネクロマンシー」と言う名のもの。私や師匠の魔法とは、全く違う種類の魔法だ。

私を襲った男は、その後師匠が言い掛けていた通り、その『アスラファイル家』現当主の長男で、第一夫人の息子。つまり、普通なら次期当主になる筈の人だったのだ。

そう、筈だった。

彼の弟には、彼を上回る大きな力と、彼を凌ぐ魔術センスを持った、優秀な弟が居た。それが、四男で、第五夫人の第一子だ。四男は、生まれた時には、既に他の子供達と変わらない力を持っている。つまり、先に生まれて、先に魔法を学んでいた子供達の力と同等の力を、生まれながらにして持っていた赤ん坊だった。

四男が生まれて少して、当主は、四男を正式な跡継ぎとする事を血族に告げた。四男がまだ赤ん坊であった事、第五夫人があまり良い身分でない（人売りに売られていたらしい）事から、他の夫人達や血族から相当の反対されたが、それを全く省みる事無く、だ。それも当然だろう。第五夫人の身分は関係無い。私の感性からすると、として、四男は当時生まれたばかりの赤ちゃんだったのだ。そんな子供を、突然「跡継ぎにする」と言われても、周りの人間は驚くしかない。

特に一番驚いた。いや、衝撃を受けたのは、第一夫人とその息子、長男だ。夫人は自分の子供を跡継ぎとして育て、長男は次代ア

スラフィル当主として育ったのだから、それまでやたらと高く築き上げられたプライドも、一気に崩された、と考えただろう。それ故に、あの母子の前では、「跡継ぎになれなかった」の一言は禁句タブーなのだそうだ。それなのに、無駄な思い切りで、はつきりと「嫡子になり損ねた」、「弟にその座を奪われた」と言った師匠は一体……。それにしても、あの激怒振りは一切何だったのだろう。最後の引き金を引いたのは、師匠の「跡継ぎがどうのこうの」発言だろうが、それ以前だ。あの男は、師匠の顔を見た瞬間に敵意を表していた様に思えた。

(……………師匠は、あいつに一体何をしたんだろう……………)

もの凄く不安になり、不信任を抱き、恐る恐る聞いてみたものはぐらかされてしまった。が、あのはぐらかし方からして、きつと何か心当たりは有るのだろう。いや、有る筈だ。顔にしつかりと「心当たりアリ」と書かれていたのは見逃さなかった。それでも、その先を知るのが躊躇われたので、聞かないでおいた。

それに、きつとそれは私の知るべき事ではない。いや、知ってはいけない事なのだろう。という事にでもさせてもらわないと、気になって気になって仕方が無い。いつかは聞いてしまいそうで、その後後悔してしまいそうな気がするから。

何となく、今の私には踏み入ってはいけない世界であるような。そんな気がしてならなかったから。

+ 第九話 + その後の日常

「師匠！何をなさっているんです！？」

ある日の午後、師匠と愉快的仲間達と私の住む小屋に、私の叫び声が響いた。いや、それはただの叫び声と言うよりは、本当に悲鳴に近いものだったのかも知れない。

「何だ、ミナミ。騒々しい」

一方、普段通りの少年姿の師匠は、床に座り込んだまま、クッキーとその袋をそれぞれ片手に振り向いた。その足下には、小さな小さなクッキーの欠片達。これを生み出した者の名前は、言うまでもない。私が悲鳴を上げた今この瞬間でも、構う事無く菓子お菓子を貪くわっている、師匠だ。

私は、鋭く目を鋭く細める。

「そこ、さつき掃除したばかりなんですけど……何でいきなり散らかしてるんですか！？」

「何を言う。これ位『散らかした』には入らんだろう？」

「私にとっては入るんです！！」

怒鳴りながら、手にしたほ箒ほうを頭上に掲げる。

すると、師匠は「まずい」という顔をして、クッキーの袋を抱えたまま素早く立ち上がり、隣の部屋の方向へ逃げていった。

「あつ！ちよつと、師匠！」

叫んで手を伸ばしてみるが、この距離では捕まえる事は不可能。

普段の師匠の身体は小さいし、身軽で、動きが速い。しかも逃げ足だけに着目すると、更に速い。師匠を捕まえるとすると、相手が動き出す事を予めあらかじ予測してからでないといけない。案の定、気が付けば白髪灰色ローブの少年の姿は、隣の部屋に消えていた。

「ミナミ、その掃除も頼むぞー」

隣の部屋からは、師匠の楽しそうな声が聞こえてくる。普段私にゲームに負け続けている所為か、かなり高い確率で私から逃げ切る

事が、嬉しくて嬉しくて仕方が無いらしい。

私は諦めて、嘆息しつつ床を掃き始める。この遣り取りに慣れてしまった自分には、ものすごい悲しい気がするが、まあ、我慢しなければならぬだろうと思う。

私が自分で、此処に残ると宣言したのだから。

あれから、アスラフィル家の長男とやらからは、特に何も無い。もちろん、それが一番ありがたいし、安心出来るのだけど、気味が悪い。もし、何も仕掛けて来ない今この瞬間に、次の何か仕掛けて来る為の準備をしていたらどうしよう、と思う。

けれど、そう思う一方で、師匠の許なら心配無いだろうという、妙な安心感もある。自分の身は自分で戻らなければならぬ、それが出来る位に強くなければならぬのも分かっている。分かっているけど、偶には弟子が師匠に甘えてみるのも良いんじゃないかな、と思わせて欲しい。

せめて、私が自分の力で、自分の身を守れる様になるまでは

「ライゼルド様はいらっしゃいますか？」

ある雪の日、琉と雪合戦ユキゴウケンをしていた。この年になって雪合戦なんて、我ながら幼稚だなど思いつつ。私の背後から声が聞こえた。それは、ボーイソプラノとでも言えば良いのか、少し高めたかめの少年の声のようで、あるいは少し低めひかめの少女の声のようで。

問い掛けられた私は、琉に雪球を投げる寸前の格好で固まり、右手を掲げたままの姿勢で振り返った。

そして、驚愕した。

私の歩幅で数歩程の距離を置いて佇んでいたのは、帽子に外套という旅人然とした格好の人物だった。顔立ちは若く、私と同じ年齢位なのかも知れない。性別は一目では判断し辛い。猫を想像させる丸い目と、少年と少女の中間、あるいは少し少年寄りの顔立ちであるのに、その顔の眉間近くと頬にある傷が、判断を狂わせる。

いや、そんな事はどうでもいい。相手が男だろうが女だろうが、どうだっていい。問題は、相手の髪の色、目の色だ。

ただ口をパクパクする私に、無表情で首を傾げる相手の髪は銀色。そして、私を見つめてくる両目の瞳の色は青色。つまり、相手は銀髪蒼眼ギンカウソウガンだったのだ。

一瞬、恐怖と驚きで頭の中が真っ白になった。しかし、すぐに我に返らざるを得なかった。

灰色の猫。琉が、私と訪問者の間に座って、訪問者の顔を見上げていたから。

「りゅ……りゅう……」

危うく、「危ないからこっちにおいで」と言いかけた。何故なら、

この凰華<sup>おうか</sup>で銀髪蒼眼と言え、ほとんどがアスラフィル家の者だ、と師匠が言っていたから。そして、少し前、私はそのアスラフィル家の長男に殺されかけたのだ。

しかし、一方的に怯える私とは対照的に、琉は人なつっこそうに小首を傾げてから、じつと相手の目を見上げている。しかも、楽しそうにしつぽを小さく揺らしてすらいる。

琉は、しばらく相手を見つめていたが、いきなりこちらに振り返って、

「水実<sup>みなみ</sup>。この人、大丈夫だよ」

「大丈夫って……何が？」

「この人の魔力、あいつと違う。あいつのは臭い感じがしたけど、この人のは雪みたいに冷たいけど、柔らかい感じがする」

琉はそう言つて、また銀髪の人物を見上げる。

魔力が違う？ 魔力は大小だけじゃなかったなんて初めて知った。

いや、でも、アスラフィル家の長男の魔力には禍々しい様な印象を受けたけど、あれは私の恐怖心が湧き上げた錯覚なのだろうか？ どちらにしろ、魔力が有る 師匠曰く だけの私にはいまいち分からない話だ。

首を捻るだけの私は完全無視で、琉は銀髪の訪問者の足の周りを歩き回る。まるで、飼い主に食事を催促する飼い猫だ。何故か、いつの間にか懐いてしまったらしい。

そんな琉を見て、彼または彼女は、一歩下がってから膝を付き、側に寄ってきた琉の下顎を優しくくすぐる。琉は、初めはくすぐったそうに身を掬<sup>よじ</sup>っていたが、すぐにじつとして、気持ちよさそうに目を細めている。

私が、そんな一人と一匹の姿を見て呆然としてみると、

「昨夜から雪が降り続くと思えば、其方<sup>そなた</sup>の仕業か」

師匠がやれやれと言いたげに溜め息を吐いた。いつの間に居たのか、

私の隣で。

その声に、訪問者は琉から手を離して振り返る。

一方、声を上げる事すら忘れる程に驚いて固まる私を後目に、師匠はスタスタと訪問者の方へ歩いていく。そして、相手から師匠の歩幅で三步程離れた辺りで止まった。

師匠に目を向けられると、訪問者は彼の前で片膝を付いたまま、頭を垂れた。

「お初にお目に掛かります。手前は」

「良い。大凡は風おおよその噂うわさで聞いておる。厄介な身体と魂を持つ、氷の術士だとな」

「……左様に」

更に頭を下げた彼または彼女に、師匠は顔を上げる様に命じてから、じつと顔を見つめる。注意深くといった印象はなく、寧ろ相手の目から何かを探る様に。

その動作を、私は喰い入る様に見つめていた。緊張半分、期待半分の気持ちで。緊張は、目の前の人物がアスラフィルの人間で、こちらに何かを仕掛けに来たのでは、という思いから。期待は、もしそうであっても、師匠ならばどうにかしてくれるという思いから。

私の思いを知らずに、師匠と銀髪の人物は互いに無表情で顔を合わせている。

そして、

「其方、菓子は作れるか？」

師匠の言葉に、その場にいる全員が固まった。普段の私なら、驚きの声の一つくらい上げそうなものだが、びっくりし過ぎて、それすらままならなかった。琉なんかは、「は」の口のままポカンと師匠を見上げている。

妙な一体感のある静寂の中、風の音がやけに大きく聞こえ、雪のゆるやかな降下でさえ大きく激しい動きに思えた。

その静寂を破ったのは、

「……菓子は趣味としております」

師匠に突拍子もない問いかけを投げられた訪問者だった。表情は相変わらずだが、声には僅かながら躊躇ためらいが感じられる。

その気持ちは物凄くよく分かる。こんな状態でそんな問い掛けを受けても、一体何と答えれば良いやら……。

一方、当の問い掛け主はニツコリと笑って、

「そうか！それならば良かった！」

一体何が良かったんだ。そんな心からの思いを必死に腹の中に留とどめながら、私と琉は更に首を傾げる。

すると、師匠は喜々とした様子でうんうんと頷いてから、銀髪的人物に告げる。

「よし、分かった。お前も私が面倒を見るとしよう」

「ライゼ！？」

「師匠！？」

琉と私が驚きの声を上げたのは、ほぼ同時だった。尤も、琉の声には喜びの色が濃かったのだけれど。つまり、琉はあてに出来ない。私は一步前に出て、師匠に不満の言葉をぶつける。

「ちょっと待って下さい、師匠！素性も分からない相手をいきなり預かるなんて……！」

私の怒鳴り声を聞き、師匠は「やれやれ」と肩を竦すくめつつ、肩越しに私を見る。

「素性は割れているではないか。『厄介な身体と魂を持つ、氷の術士』だと」

「それは『風の噂』だと仰っていたじゃありませんか！」

「私にはそれだけで十分なのだよ」

「私には不十分です！」

「何だ何だ、水実。お前も元は素性の知れぬ者だったではないか」

「……うっ……」

そう云われると、反論が出来ない。元を辿れば、私も森の中を彷徨っていた、何処の誰かも知れない者だったではないか。それならば、『風の噂』でも何でも、ある程度は知っている方が、よっぽど

素性が知れている……いやいやいや！流されては駄目！

なおも縋<sup>すが</sup>ろうとする私に、しかし周りは全くもって無視だ。私を置いて、どんどん話は進んで行っている。

「さて、お前の部屋はこの猫が案内するとして、まずはこの小屋での規則を伝えねばなるまいな。この小屋では、お前の出来る範囲で何をせねばならない。掃除、洗濯、炊事、私の菓子作り、何でも良いが、我等が不利益を被<sup>べ</sup>る事は禁じられている」

「あのー……もしもし？師匠？」

「今は家事全般はミナミの仕事であつたが、菓子が作れる位だ、お前も何か出来るのだろう？」

突然問われ、銀髪の人物は一瞬だけ考える様な素振りを見せてから、コクリと首肯する。

「はい。人並には」

「だそつだ。良かったな、ミナミ」

「はあ、まあ、良かったです……が！ちよつと待つて下さい、師匠！」

こちらに注意を向けた際に抗議をしてやろうとしたが、それよりも早く師匠は自分の言葉を紡ぎ続ける。

「お前達の食糧は、此処から下の村<sup>しも</sup>や町に下りて買つたり、物々交換をするなり、森の中で採集するなり、狩猟をするなり、まあ自由にやれ。余り狩り過ぎられても困るがな」

「師匠！私の話を聞いて下さい！」

「ああ、この小屋に住むものが森の獣を狩つて帰つて来る事もあるが、まあ驚くな。食物連鎖と云うものだ。その時は、お前も有難く獣の肉を頂戴しろ。解体が出来るなら、解体してやれ。ミナミもするが、二人で解体した方が楽だろう」

「師匠！聞いてます！？私の話を聞いて下さいーい！」

私の渾身の叫びに、漸<sup>やっ</sup>く師匠の口が止まった。まるで、楽しい遊びを邪魔された子供が母親に抗議する様な顔で、振り向いて来る。

「何だ、ミナミ？今良い所なのだぞ？邪魔立てしてくるな」

「『良い所なのだぞ?』、じゃありません!私は、この人と一つ屋根の下なんてごめんですからね!？」

「んん?何だ?ミナミにも男の好みがあつたのか?」

「違います!……って、男!？」

「そうだぞ?気付かなかつたか?」

いいえ、気付きませんでした。それ以前に、気付けと言う方に少し無理があるんじゃないかな、と思うのだけれど。……いや、そんな事、今はどうだっていい!

私は件の人物に目を向けた。

「そうじゃなくて、アスラフィル家の人間と一緒に暮らすのが嫌なんです!」

「……アスラフィル?」

少し前まで師匠の話の話を黙って聞いていた彼が、ようやく口を開いて、私の方に目を向ける。何故か少し警戒している様な声の響きだった。

しかし、師匠はあつけらかんと、

「ミナミ、この者はアスラフィルとは無関係だ」

「え?無関係って……だって、その髪の色と目の色……」

「よく見る。奴とは何処かが違う筈だぞ?」

そう言われて、よく相手の姿を見してみる。何度見ても変わらない銀色の髪と青い瞳。顔立ちは、決してアスラフィル家の長男に似てはいない。しかし、髪の色が、目の色が、あの男の印象とよく似ている。あの男を思い出させる。そんな相手の姿をよく見るとは、師匠もなかなか酷な事を言ってくれる。

そう思っていたのだが、

「……あ……」

「気付いたか?」

問われ、こくこくと頷いた。あのアスラフィル家の長男と彼とで違う所に気付いた。

(瞳の色……)

あまり思い出したくもないが、あの男の目の色は鮮やかな青色だった筈。しかし、目の前に佇む彼の目の色は、湖の底を思わせる、深く暗い青だった。

ぼかんと口を開ける私に、師匠は高らかに笑いながら告げた。

「やれやれ、ミナミも人騒がせな。容姿のみで相手を拒むとは、何処かの国の姫君の様ではないか」

「そつ……そんな事言っただって、凰華で銀髪蒼眼と言えばアスラフイル家の者だ、って言ったのは師匠じゃないですか！」

「んん？そんな事言っただか？」

「言いました！」

そつ言い切るも、当の本人は口笛を吹いてそつぽを向くだけ。

……どうやら、誤魔化しているだけらしい。

煮えくり返りそうになる腹を何とかして鎮めつつ、私は再び口を開いた。

「いくらアスラフイル家の人間じゃないにしても、いきなりやって来た相手を弟子に取るなんて……」

「それは、ミナミも同じだっただろう？」

「そうですね！」

「心配するな」

突然、師匠の声音が変わった。ぼわぼわとした印象だった声が、しつかりと芯の通った印象の声に。思わず、口を閉ざしてしまう。

そんな私に、師匠は自信に満ち溢れた笑みを湛えつつ、告げた。

「この者がお前の不利益となり得るならば、仕置きをしてやる」

「……………はあ？」

私だけでなく、銀髪の人物までもが呆然としながら師匠の方を見る。ちなみに、琉は腹を抱えて笑い転げているので、無視だ。無視。

一方、師匠は自分の発言に対する反応に納得がいかないらしく、思い切り眉をひそ顰めて言った。

「何だ？何が不満だ？」

「いえ……お仕置きなんて、随分軽い仕打ちだなんて思いました…

…」

「あはははっ！お仕置きだつて！かつるゝいつ！」

「なっ……何を言うかミナミに琉！私は本気なのだぞ！？」

寧ろ、本気である事の方が嘆かわしいと思うのだけど……。そう言いそうになる口を必死に閉ざしてから、溜め息を吐く。琉は琉で、

「おなかいたゝいつ！」と更にケラケラと笑い声を上げる。

そんな私達の反応を見て、師匠は更に口を曲げる。

「全く、無礼な者達だとは思わんか？」

そう問われたのは、銀髪の訪問者だ。彼は、首を一度傾げてから、横に振った。

「言葉こそ違いますが、私も彼女と同様の思いですので」

「……むう。四面楚歌、と言うものか」

言いながら、師匠は盛大に溜め息を吐いた。こんな所で、こんな状況で引き合いに出されたら、その言葉の所以となつた国の武将もたまつたもんじゃないだろう。

そんな思いで見守っていると、師匠は両手を腰に当ててから胸を張るようにして言った。

「とにかく、この小屋の主は私だ！私が許可を出したのだから、誰にも文句は言わせん！」

ついには、小屋の主あめしと言う権力を振るつた。こうなつたら、手の付け様が無い。駄々をこねる子供の様に、自分の意見が通るまで意志を曲げようとはしないのだ。

諦めるしかない。私はやれやれと肩を竦めながら、

「分かりました。師匠のお好きになさつて下さい……」

「うむ。当然だ」

自信満々に告げて、自信満々に腕を組み合わせた。そして、楽しそうに踵を返すと、

「ミナミ、琉、その者を部屋に案内してやれ。私は皆に朗報を告げねばならん」

かなり楽しそうに、軽い足取りで小屋の中に消えた。弟子が増える

事が、それ程までに嬉しいのだろうか　いや、師匠はその弟子が作るであろうお菓子に喜んでいるのだろう。自分の年を数えなくなる程生きてきた人間が、まるで私より年下の子供の様だ。いつもの事かも知れないけど。

私は溜め息を吐いてから、振り向いた。

「じゃあ、案内しますね」

「宜しいのですか？」

何が？その意を込めて、首を傾げた。

彼は、すり寄って来る琉を一度チラリと見てから顔を上げ、

「貴方は私の弟子入りを快く思っていない筈では？」

私の顔を真つ直ぐ見据えて、思いの外はつきりと告げた。

「何処の馬の骨かも分からない、ましてや敵かも知れない私を、貴方は警戒していました。それなのに、あの方は私を受け入れてしまった。いくらあの方の許しが出たとは言え、貴方は私の弟子入りが不服ではないのですか？」

驚いた。露骨すぎる程警戒をしていた私に、氣遣う様な言葉が飛んで来た。そんな事を言える様な人だったのかと思うと、その警戒も緩くなってしまう。

その所為か、ついついまた本音が出てしまった。

「ええ、不服よ。本当なら、このままお引き取り願いたい位に」

「駄目だよ水実！」

私の言葉に、琉が飛び上がらんばかりの勢いで驚いて、振り返ってくる。

「折角仲間が増えたのに！」

「ごめん。琉は少し黙ってて」

少しきつい口調で琉を黙らせると、琉はいたずらを咎められた飼猫の様に、シュンとうなだれる。そんな風にされたら、私が悪いみたいで心がちよつと痛むが、今はそんな事を構っている暇ではない。

私は、琉から銀髪の人物に視線を移してから続ける。

「けど、あなたはどうするの？こんな所まで来て、弟子入りをしたい相手の許可までもらったのに、たった弟子一人に反対されたからって、大人しく身を引くの？」

「いいえ」

私の問いに、彼は即座に答えた。真っ直ぐな目で、静かだけれはつきりと響く声で告げる。

「拒まれるのは、元より覚悟の上。それでも喰い下がるつもりで参りました」

「……でしょ？」

そう言うだろうと思った。こんな山奥に、しかもあんな変わった人の門を叩く位だ。それ程の覚悟はあるだろう。

「なら、私に構う必要は無いんじゃない？確かに私はあの人の弟子で、あなたよりも先に此処にいたけど、最終的な決定権は師匠にあるんだから」

「ですが」

「それにね」

何かを言おうとする彼の言葉を遮りながら、私は続ける。

「師匠が駄々をこねてまで弟子入りを許す人だもの。破滅的に危険な人でもないでしょ」

そう。いくら師匠でも、自分達にとって害となり得る選択なら、訳もなく駄々をこねてまで自分の意見を通す事はない。あそこまでするのは、ある程度安全だと分かった時位だろう　と言う事にしておこう。

未だ表情を変えない相手に、私は笑った。

「だから、もう反対はしない。その代わり、あなたが私達に何かをしようものなら、容赦無く追い出すから、肝に銘じておいて」

「はい。心得ました」

そう言いながら、彼も微かに笑う。……そうやって笑われると、本当に女の子みたいだなあ、と思うが、当然口には出さない。

私の言葉を聞いた瞬間、琉は「やった　やった　」と顔を輝かせ

て銀髪の人物の周りを飛び回る。その姿は、飼い主にじゃれる猫ではなく、飼い主の帰りを喜ぶ犬みたいだ。

「ところで、あなた、名前は？」

私は彼の顔を見ながら言った。その声に、彼と琉が私の方を見る。そして、琉の方が先に声を上げる。

「僕は琉！で、こつちが水実」

「……狩尾水実です」

琉に先を越されたので、ちゃんとフルネームで名乗っておく。

「それで、あなたは？聞いても大丈夫かしら？」

私の問いにコクリと頷いてから、彼はまた微笑んだ。

「私は」

それは、また別の話。

+ 終章 + (後書き)

【師と弟子のスケルツォ】の最終話をご覧頂き、ありがとうございました。

この話はこれで終わりですが、水実達の話はまた別の話として書くかも知れません。

その時は、またお付き合い頂けたら嬉しく思います。

また、何処かで彼女等の姿をお目にかかれる様願いつつ。

この作品をご覧頂き、誠にありがとうございました。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2541c/>

---

【師と弟子のスケルツォ】

2008年8月29日17時45分発行